

霧雨がさわさわと音を立てながら、視界をぼんやりと白く染めている。新緑が左右に迫る石畳の階段を下駄で踏みながら、男は小さく息を吸い込んだ。雨混じりの湿っぽい空気が舌に触れて、喉の向こうへ落ちていく。

寺院の山門はいまだに霞む景色の向こうで、石段はまるで別世界へと続くように途中で白い霧へと溶け込んで見えている。

この道歩く者は、男のほかにも見えず、それがまた男を夢ともうつつともつかない心許ない気持ちにさせる。

そういえば今朝、宿を起つ前、朝食の席で誰かが言っていた。「今日はだんだんと雨が酷くなるから、山の奥へは入らないほうがいい」と。なるほどそれは良かろうと思って、男は一人、席を立ったのだった。

もとより、死出の旅のつもりで故郷を出た。この世のせめてもの思い出に、靈験で知られるこの山を一巡りして、その途中、道を逸れたいずこかでひっそりと果ててしまえば良いと思ったのだ。

思い返せば、たった一人でこんな遠くまで来たのは、何十年と生きてきて初めてのこ

とだった。生まれた故郷で孤独とは無縁の暮らしをして、生まれたのと同じ土地で生涯を送り、安穩と死を迎えるものとはかり思っていたのに……もうあとわずかな余生のみを残したところで、人生はこんなにも覆ってしまう。

こんな雨の肌寒い日ですら、油断すれば色も鮮やかに思い出す。

それまで安寧を享受し続けた故郷の地が、ある日突然、戦火に焼かれたのだ。それはなんの前触れもない、なんの意味もない戦争の供物だった。小競り合いを繰り返していた周辺諸侯が、盤上の遊技を現実を持ち込んで、陣取り合戦など始めた。その最初の一矢が、たまたま男の故郷の地へ突き立ったというだけのことだった。

そんな安易な理由で始まった戦争だというのに、犠牲者の数は膨大だった。男の故郷で、命からがら生き延びた者は半数にも満たなかった。陣取り合戦の勝者によって連れ去られた者たちもいて、彼らは以来、一度の音沙汰もなかった。そうしてわずかに残された者たちの顔を、男は覚えていなかった。ただひたすら失意に暮れているうちに、一人また一人とその場を去っていき、いつしか皆が散り散りになってしまった。やがて男も、わずかに手元に残った財産だけをもち、焼け野原となった故郷を後にした。妻も子供も、親類縁者に至るまでことごとく、その手に繋ぎ留めることはできなかった。

そうして初めての一人旅に四苦八苦しながら歩く道中、故郷を焼いた諸侯たちは、さらに大きな権力の渦に敢えなく呑まれてあつけない最期を迎えたと聞いた。なにもかもを奪った憎き者たちのことだというのに、心は不思議なほど穏やかで、なんの感情も湧いてはこなかった。心から感情が干からびて、ただ身体だけが当たり前に人の営みを続けているような、虚しいだけの日々がさらに続いた。

霊山のことを知ったのは、そんな折りだった。現世と霊世が混じり合うその山におわす神は、生ける者を現世に留め、自力では現世を去れぬ死者を霊世へ送るのだという。男は一も二もなくその山を目指すことを決めた。

生きながらに死んでいるようなこの身は、きっとその山で霊界へと選別されるだろう。この世のどんな死に方よりも、それは素晴らしい方法に思えた。霊世で再会する愛しい者たちへの土産話にもなろう。

そうして、故郷を発つてからほぼ一年が経つ頃、男はついに霊山の麓へ辿り着いた。莊厳と言うにはどこか殺風景な灰色の大鳥居を一札してぐり抜けると、肌に触れる空気がたちどころに変わった。雨のせいだけではない、冷たく清浄な空気が肌をびりびりと刺激する。

道は広い石段から始まり、途中で細くなったり再び開けたりしながら、幾つにも分岐して山へ谷へと登り降りを繰り返して続いた。その道中に小さな社や寺院がひっそりと門を構えるのを幾度も横目にしながら、男は休むことなく奥へ奥へと進んでいく。

霊山には親となるような大きな神社組織は存在せず、祈りを捧げる小さな拝殿や伽藍が、それぞれ独立して山中にぽつりぽつりと点在している。訪れる人々が自由に訪れ祈りを捧げることもできれば、外界との繋がりを絶って修行を行う場所もある。それらが霊山のなかにいくつあつて、どこになにがあるか、その全体を知る者はいない。この山では、誰もが思い思いに、隣接する生と死を思つて過ごすのだ。

男が山に入ってから、いったいどれだけ時間が経つたのか。空は朝と変わらないまま、薄く垂れ込めた白い靄に似た雲に覆われている。かなりの距離を歩いてはいるはずで、足は気だるい疲労を感じてはいるが、不思議と息は上がらず、規則正しい呼吸はまるで「進め」と己を鼓舞するように耳の内側で鳴り続けている。

ここはもう現世ではないのかもしれない、と、男はぼんやりとする頭で考えた。道は狭い参道から、いつしか広い石畳の階段へ変わっていた。

男が無言で石段を登り続けると、やがて霧雨の遙か彼方にうつすらと朱色の門が見え

始めた。雨にくすむ景色はすべてが色褪せて見えるのに、その朱色だけが鮮烈な色を放ってそこに存在している。男は思わず足が止め、その山門へ手を合わせた。

そのときふと、左の手首にはめた数珠が男の視界に入った。一年あまりの旅の中で、どんなにつらくひもじい思いをしても手放すことのなかった、数少ない故郷からの思い出の品。大切な形見だというのに、身に着けていることさえ山に入ってから今まで失念していた。

男は合わせていた手を下ろして顔を上げ、再び歩き出そうとした。しかしその瞬間、左袖がかすかに後ろへ引かれたような気がして、振り返った。

果たして男の後ろには、女が一人佇んでいた。年の頃なら四十路絡みといったところ。藤色の小袖をかつちりと着込み、右手に持った傘を男のほうへと差し掛けている。左手は男の纏う羽織の左袖を控えめに挿んでいた。髪を結い上げ顔をはつきりと男のほうを仰いでいる。

男は、その女が急に背後に立ったことよりも、あまりにも見慣れたその容貌に驚いた。
「紫穂」

それは、故郷で失ったはずの妻の姿だった。

紫穂は夫よりふた回り年下で、二人は親子ほどに年の違ふ夫婦だった。しかしながら、その年の差を悟らせない落ち着きと器量を兼ね備えた妻は、男にとっては自慢の愛妻だった。

女は傘の影から男を見上げて、薄い色の紅を引いた唇を開く。

「旦那様、お戻りくださいませ」

こちらへ呼びかけるときに、わずかに首を右へ傾げる仕草。元来からあまり感情を表に出さない妻は、どんなときでも少し寂しそうな目をしてこちらを見る。長らく思い出すこともなかったそんな記憶が、一気に溢れ出るように蘇る。

「紫穂……、紫穂なのか？」

いったいこれはどういうことだろうか。妻は一年前、確かに故郷の地のあの悲劇のさなかに死んでいる。この手で葬送の火を手向けたのだから間違いない。それが、遠く離れたこの地で再びまみえようとは。

女は男の問いに答えることなく、掴んだ袖をまたかすかに引つ張った。「お戻りくださいませ」と、繰り返す。

ここは現世と霊世を結ぶ霊山。その力が、霊世の人である妻を男のもとへ遣わしたの

だろうか。男は身体ごと振り返り、階段の一段下に立つ妻の姿をまじまじと見つめた。

見れば見るほど、その姿は死の直前までの妻と同じに思える。着物も、彼女がこの季節に好んで着ていたものと同じ柄のものだ。男はその存在を確かめようと、己の右手で彼女の左手を取り、己の左手で、彼女のかんばせに触れた。冷え切った己の手に、ほのかな温もりと皺の感触が伝わってくる。彼女は間違はなくここにいる。

「紫穂？ おまえは一体どこから……、どうしてわたしに戻れと言おう？」

頬紅のかかるあたりを親指でさすると、女はその手に甘えるように顔を少し傾けた。俯きがちになった目元にほんの少し浮かんだ照れ笑いに、男の胸が震える。

「……ずっとおそばにいました。ご自分のおられぬところで旦那様にもしものときが来たならば、お助けするようにと……、わたくしは紫穂様より命を授かっております」

「どういうことだ……おまえは紫穂ではないのか？」

「はく」

妻の姿をしたその女は、そこを指し示すように目を一度大きく見開いて見せた。雨で色彩の落ちた視界に、菫色の瞳が見えた。妻の目は黒い瞳だったはずだ。

男はたちまち恐怖を感じた。記憶にあるそのままの姿で目の前にいる妻が、妻その人

ではないと言っている。激しく裏切られたような、酷い悪夢を見ているような心地がした。

「おまえは誰だ？ ……いや、なにものだ？」

震える声で男は訊ねた。女は表情一つ変えることなく、淡々と答える。

「旦那様。紫穂様はずっとずっと、今際の際まで、旦那様の幸いのみを念じておられました。どうか紫穂様の願いを汲んでいただけませんか？ このような場所でお一人きりで身罷られては、紫穂様もさぞお嘆きになりましょう」

恐怖が次第に醒めれば、次に芽生えてくるのは怒りだった。妻の姿を取りながら「紫穂様」と妻を呼び、己ばかりがすべてを知っているかのように語る。それがこの女の傲慢に思えて、ひたすら気に入らない。

「知ったような口を聞くな！ この化け物め！」

これはきつとこの霊山に棲む狐狸のたぐいに違いない。姿かたちを似せて言葉巧みに人を騙す、油断のならない奴らだ。死を求めて山へ入ってまで、こんなくだらないの輩のからかいを受けなければならぬのか。こちらはただ、心静かに逝くことだけを願っているのに。

男は怒りにまかせて激しく女の手を振り払った。表情のなかった女の顔に、初めて驚愕の色が浮かぶ。

直後、女のその表情の意味するところに気付いた男は、「あ」と声を上げる。後ろへ大きく均衡を崩した女の身体が、石段を踏み外して背後へ傾いでいく。手を伸ばして引き戻そうとしたが、手はあえなく宙を掻いただけだった。

「紫穂！」

背中から落下した女は、そのままごろごろと石段を下へと転がり落ちていく。男はそれを追って慌てて石段を駆け下りた。

無我夢中でいったいどれだけ石段を下っただろう、転がり落ちる女の目が一瞬、男の目とはつきりとかち合った。董色をした光が、きらりとまたたく。

すると直後、不思議なことが男の目の前で起こった。

女の身体が大きく中空へ跳ね上がり、宙に浮かんだその姿が無数の小さな珠となって弾けたのだ。ばらばらになった珠は速度を増して石段を跳ねながら散り散りに落ちていく。そのなかに一つだけ、ひととき煌めく青紫の珠があった。男は、あれだ、と狙いを定めてなおも石段を駆け下りる。

石段を不規則に跳ね回って落ちて行った珠は、やがて敷石の一つに刻まれた窪みにすっぽりと嵌って動きを止めた。気が付けば男は階段の一段目まで戻ってきていた。薄呆けた意識のなか、夢遊病者のように階段を登っていたつい先刻の自分が、まるで他人に思えるほど、今の男の意識ははつきりとしていた。

男は、窪みに嵌った珠を、指先でそっと摘み上げる。もう落とさないようにと、珠を持つ手にもう片方の手を慎重に添えた。左腕に巻いていたはずの数珠が姿を消していたが、男はもう驚かなかった。

砕け散った数珠に繋がれていた、菫色の珠。それはもともと、妻が婚前から長く大事にしてきたネックレスに繋がれていたものだった。結婚して和装に落ち着くようになってから「着物には似合わないから」と言って身に付けなくなり、なにかの折りにお守りとして数珠に繋いで男へ贈ってくれた。

妻に似ていて当然だったのだ。これは、妻をずっとそばで見守り続けた守り石で、妻の夫への想いが詰められたものだったのだから。

「……ありがとう」

男は菫色の珠を両手に包んで額に寄せ、祈るように目を閉じた。

それから目を開けた男は、背後に伸びる石段を振り返ることなく、地上目指して参道をくぐり始めた。

いつの間にか霧雨は上がり、空は幾分明るくなっていた。

輝石の歌（きせきのうた）

© 2014 とや(toya) / さらてり-solitary-

発行日 2015年9月20日（第三回文学フリマ大阪にて）

発行者 とや（さらてり -solitary-）

連絡先 Web URL <http://solitary.jakou.com/0720/>

Mail nephrites@gmail.com

デザイン ちはる（Са я pe:D!em）

印刷所 しまや出版 <http://www.shimaya.net>

落丁・乱丁本はお取り替え致します。

お手数ですが、上記連絡先までご連絡ください。